

---

 書 評
 

---

Kurt Flasch : *Augustin. Einführung in sein Denken.*

Stuttgart, Philipp Reclam jun., 1980, 487 S.

塩 路 憲 一

西独で久々にアウグスティヌス（以下「A」とのみ記す）についての総合的研究が出版された。著者は Bochum 大学で中世哲学を担当するベテラン教授で、現在 Felix Meiner 社から刊行中の *Corpus Philosophorum Teutonicorum Medii Aevi* の編集指揮にあたっている。また Dietrich von Freiburg の *Opera* の編集者としても著名である。Reclam 社からは本書以外にも *Geschichte der Philosophie in Text und Darstellung* シリーズ第二巻 *Mittelalter* が同著者によって刊行されている。

本書は西独でも実力を認められている一流の研究者が、古典的名著の出版で名高い Reclam 社から世に問うA論である。評者のみならず、多大の期待を抱いて本書をひもとく向きも少ない筈はない。

さて本書は副題がAの思索そのものへの入門となっている。序論によれば、その方法論は次の二点に要約できる。1) Aの思想の歴史的源泉を厳密に記述する。2) Aの思索を「共に考える 'mitdenken'」しかし、その際問題を一切現代化しない。著者の意図は、体系的叙述をやめ、genetisch にA思想にアプローチすると共に、嘗て存在した歴史的状況を再現し、その中に著者自らが入り込み、Aの思索過程を追体験しようというところにあるようである。

著者はAの思想発展を三期に分け、第一期（354—388年）と第二期または過渡期（388—396）は「第一部 Grundlegung und Krise (354—396)」で、第三期は「第二部 Bleibende Strukturen」で取扱っている。

上記発展区分の基準は新プラトン主義である。第一期のAは全く新プラトン主義者、第二期のAは新プラトン主義の一端を超える。第三期では、Aは異教の古代哲学に距離を置かんとする教会教義家である。

第一期のAは、著者によれば次の通りである。Aは新プラトン主義的的主知主義者で、全てが新プラトン主義化され、理解される。しかも、この新プラトン主義は「短絡的」である。例えばAにあっては、人間の魂は言語や思惟の媒介によっても、経験界から叡知界へと上昇することが出来ない。プラトンにあった両界の繋りは全く切り取られている。その結果経験界は全く余計なものとなっている。また、この時期、Aにとっては信仰とは哲学的真理に達するために必要な心理的条件であるにすぎない。哲学は信仰より上層にある。

本書をここまで読みすすんで気付くことは、著者のAに対する距離である。Aを新プラトン主義的的主知主義者と呼び、「短絡的」プラトン主義者とレッテルを貼るに急で、Aの思索の内側に踏み込む努力はなされていない。新プラトン主義的表現の奥にある筈のAの根源的体験とでも呼ぶ他ないものが、少しも扱えられていないのである。また上述の論点の根拠として著者は *Soliloquia* II, 4, 5 や *De ordine* II, 5, 6 を挙げているが、論拠としてはあいまいである。

著者は第二期を391年を前後に二分している。391年はAが司祭となった年である。すでに<自然の事物は、物質をも含めて、ことごとく善である>という認識によって新プラトン主義の一端を破ったAは、391年司祭となることによって、古代哲学に内在するエリート意識を捨て、大衆に向かわざるを得なかった。このことがAに新プラトン主義に対して距離をとらせたというのである。

この第二期あるいは過渡期の特徴は新プラトン主義に対抗してパウロ的思想がAの思索の重要な要素となって来ることである。しかし、新プラトン主義との決裂は396年以降に持ち越される。但し、著者によれば、決裂とは言っても、Aは結局生涯新プラトン主義を克服することは出来ないのである。過渡期に現われたパウロ思想は新プラトン主義に矛盾対立したまま、Aは生涯二元論を超えることが出来ない

のである。

新プラトン主義への距離は第三期になって明瞭となるとする著者はそれを恩寵論と原罪論にみる。著者によれば、その恩寵論及び原罪論は次のとおりである。1) Aは自由意志を放棄する。2) 「悪」は神の予定によって定められてある。「悪」は、もっぱら、この「悪」を克服して「救い」に到るようあらかじめ定められた少数エリートの教育手段である。

著者はこのような恩寵論や原罪論理解の鍵がローマ帝国末期の社会情勢にあるとする。末期症状を呈するローマ社会で、Aは、個人の意志では動かせない、勝手気ままに働く力を、不安につかれて動きまわる人間の姿の中に見た、というのである。つまり、Aは、新プラトン主義的の知主義では解明できない現実体験を持ったというわけである。

著者は方法論として、歴史的アプローチを主張しているが、ここではこの方法論が適用されているわけである。Aの恩寵論や原罪論がAの歴史的体験に還元されるのである。評者には、しかし、この場合、このようなアプローチは、哲学的思索の弱さと見えてしまう。事実著者は、Aの恩寵論や原罪論を前に、理解の糸口をつかみかねているようである。思想的に把握出来かねて、歴史的背景をのべることで辻褃をあわせようとしているようである。これと同じ例はAの精神分析である。著者はAにあって「性」が大きな問題となっていることを指摘したのち、これをAと母モニカの性的葛藤に由来するものとする。これではAが「性」なる表現を以って思想家として伝えんとする事柄が、少しも解明されたことにならない。Aを *mitdenken* するとは、Aの歴史的体験や精神分析を持ち出すことなのか。

本書第二部は *Confessiones*, *De Trinitate*, *De civitate Dei* の分析が三本の柱となっている。

著者の *Confessiones* 評価は次のとおりである1) *Confessiones* はAの恩寵論の哲学的論述である。2) 神の目で、いかに高慢な自尊心にとらわれた人間が神の手によって絶望へと追い込まれ、信仰へと向かわしめられるかを描いたものである。こうしたのち、著者は問う。何故生活の或る局面での行き詰まり体験にすぎない絶望が、必然的に神信仰に繋って行かねばならないのか、と。自ら答えて言う。ある生活局面で行詰った者は、<それまでのことは全て自分に誤りの原因があるのだ。そ

の反対に全ての「善」の根拠は神にあるのだ」と、全ての榮譽を神に帰することによって、新しい局面打開を計る。これがAの恩寵論だ、と著者は主張するのである。

*De Trinitate* は、著者によれば、*Confessiones* で展開された恩寵論によって強調されすぎた神と人間との絶対的断絶を和らげんとする試みである。三位一体性を以って神と人間の相関関係を説かんとするものであり、結局は神と世界を擬人化せんとする努力である。

著者はこのような *De Trinitate* のAの営みを、歴史的に、教会教義家となったAの、対異端派正統派グループ意識の自己表現だとする。

第二部の最後は *De civitate Dei* の考察である。著者によれば、この書は現代的意味での歴史哲学の書ではない。終末論によって、異教徒に対してキリスト教を弁護せんとする教会教義家の努力の結晶である。

最後に著者は *Der Zwiespalt Augustins* と題して本書の結論をのべる。前に既にのべた如く、著者によればAは自己の思想内部にある二元論を克服することができなかった。思想家として一貫せず、常に内部に矛盾対立を残していた。この内面の矛盾対立から由来する不安 (Unruhe) がAにあって、Aの思想をかえって常に生々したものになっている力である。それ故今日、Aにあって評価されねばならないのは、もっぱらこの力である。

さて、評者は次の点に限って、ここまでのところを批判しておきたい。1) *Confessiones* の絶望を単に生活局面での、ありきたりな行詰り体験と解すれば、救いが少数エリートのためだとする著者の主張と食い違って来るのではないか。2) また、著者の主張によれば、391年古代哲学のエリート意識を克服した筈のAが、再び「救い」を少数エリートに帰せんとするとは、著者の主張に矛盾があるのではないか。3) *De Trinitate* が正統派グループの自己意識の表現と見るのは、現在の時点からのA評価であって、著者が主張する *mitdenken* からの評価ではない。4) *De Trinitate* は擬人化よりも、むしろ神認識を通して自己認識を深化せんとするAの思索的努力なのではないか。5) Aは *inquietum cordis* (Unruhe) を *Confessiones* の有名な箇所述べているが、この *inquietum* をAの思想家としての一貫性欠如に帰してしまうかの評価は皮相的である。

総合的に評して、本書は序論で挙げた *mitdenken* に成功していない、またAの人間像を少しも浮かびあがらせようとはしていない、と言えよう。Aの肉声が一向に聞こえて来ない *mitdenken* などあり得るものだろうか。

著者は「序」にジルソンとヤスパースの名を挙げ、特にこの二人の体系的A論に対抗した、と述べているが、果して著者は、これら二人に対抗し得るA論を展開したか。その答は否定的である。西独中世哲学界を代表すべき著者が、定評ある Reclam から出版した本書である。期待が大きかっただけに、その期待を裏切られた思いでいるのは評者のみではあるまい。以下に München 大学教授 Helmut Kuhn の批評を紹介して、評者自身の結論にかえたい。

本書のA理解は皮相的である。著者の秘かな意図はヨーロッパ思想をAから解放しようとするところにあるようだ。また、ここ十年、西独はA研究の分野で沈黙しつづけて来たが、その間、国際的研究は素晴らしい成果を挙げている。本書はその成果に一言も触れていない。西独はA研究にあって、すでに地方化してしまったのであろうか。翻って、本書は十年前の西独の研究水準に達していると言えるだろうか。その答は否定的である——。

H. Chadwick : *Boethius : The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy.*

Oxford : Clarendon Press, 1981, xv+313p.

石 井 雅 之

本書は、M. Gibson(ed.) : *Boethius : His Life, Thought and Influence*, Oxford : Basil Blackwell, 1981 (チャドウィックによる Intr. を含む) とともにボエティウス